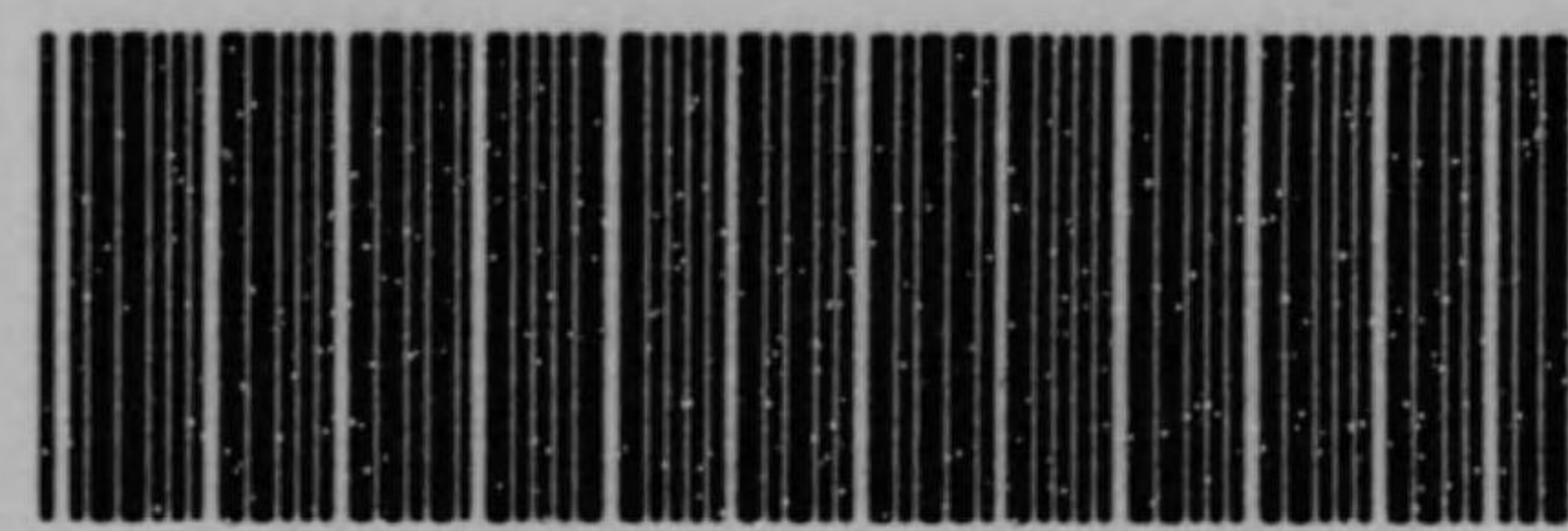


AZ
651
93

海洋時代

国立国会図書館



* 0056445000 *

0056445-000

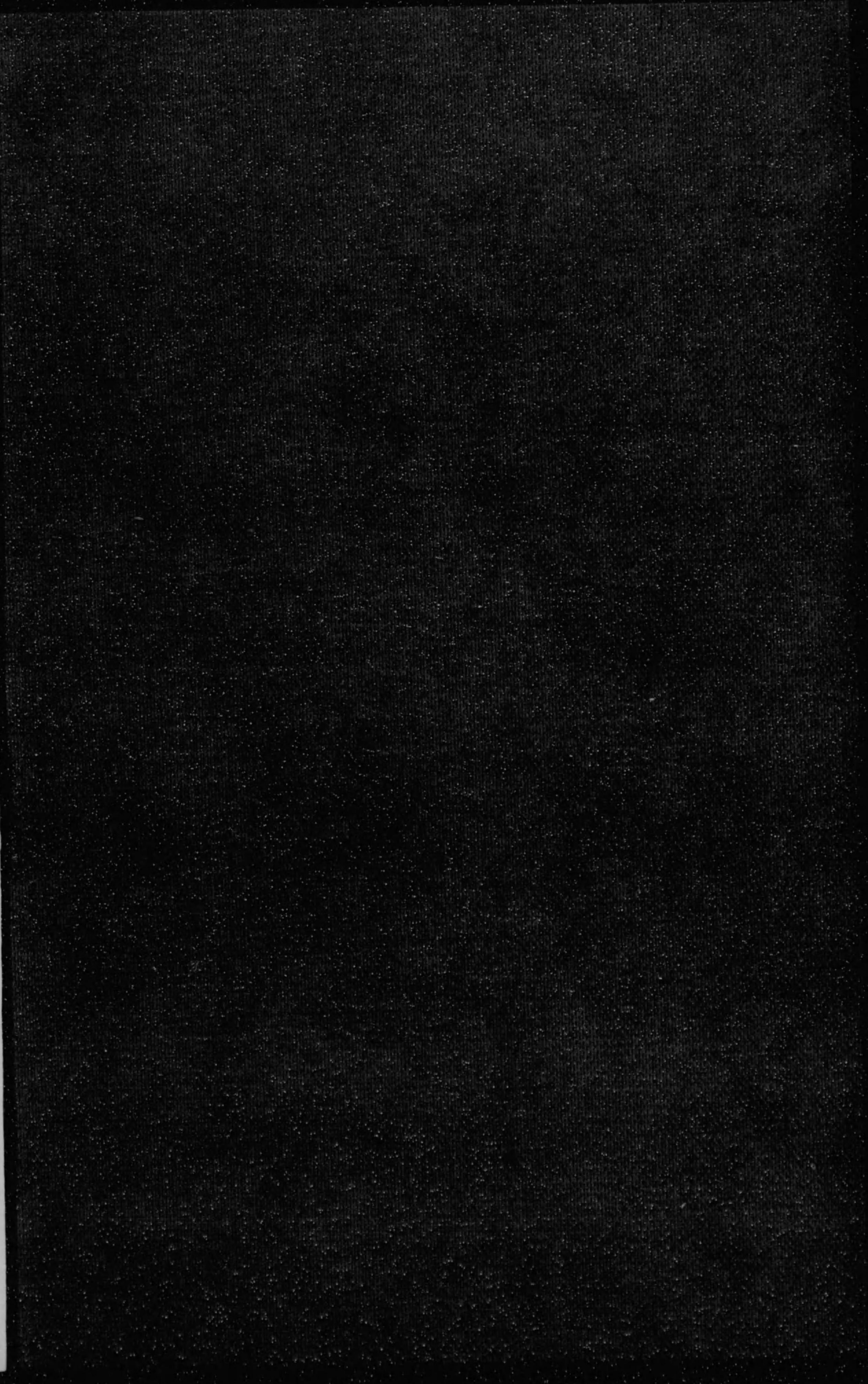
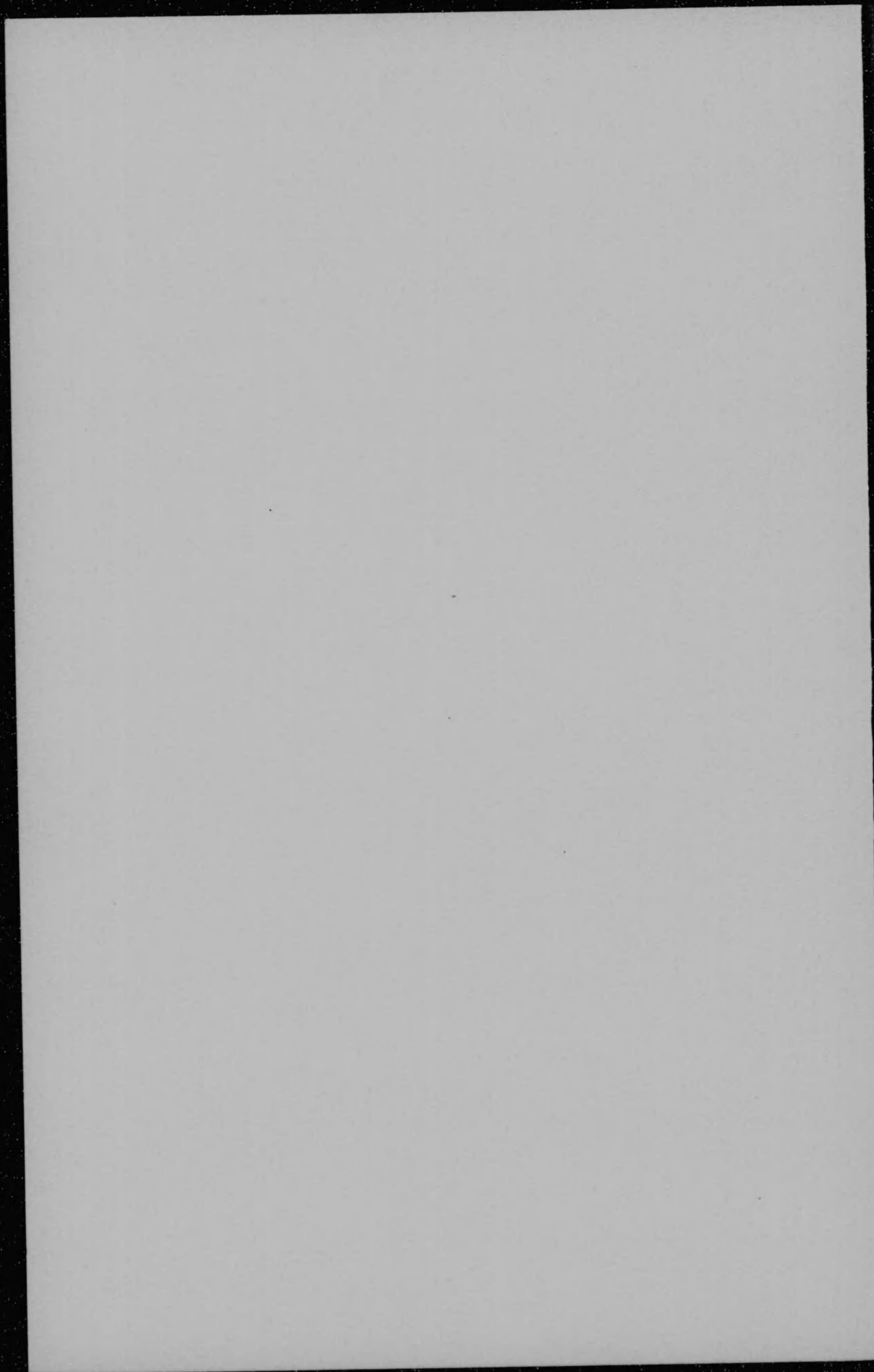
AZ-651-93

海洋時代

海軍省海軍軍事普及部

1934

AJC



AZ
651
93

海洋時代

昭和九年二月

(印刷代騰寫)

海軍省海軍軍事普及部

AZ
651
93

海洋時代

内容

- 第一、緒論.....(一)
- 第二、大陸か海洋か.....(六)
- 第三、海洋發展の重要性.....(一六)
- 第四、國民生活と國防との關係.....(二四)
- 第五、日本の國民生活と其の障礙.....(二七)
- 第六、日本の國防と海軍.....(三〇)
- 第七、結論.....(三三)

392-1

本稿ハ軍事普及部一部員ノ作業ニ係リ研究資料トシテ適當ナルモノト認ムルニ付一般ニ頒布ス



1028457

海洋時代

第一、緒論

一、昔日本には「日本は東洋の英國」であると云ふ言葉が流行したことがあるが之は勿論親英思想の表現ではあるけれども日本は純然たる海洋國として立たなければならぬと云ふ主張が多分に織込まれてあつたと思ふ。

海外に廣漠たる領土を有し太陽の没することを知らない英國と日本とを比較したと既に錯誤たるに相違ないが、日本人としては英帝國の本質に就いても、もつと深刻な研究が必要ではなかつたらうか。

二、日本は陸地丈けで立つて行けるものでないと同時に海洋丈けでも立つては行けぬ。であるからして茲に海洋時代と言つても、それは海洋丈けで立つて行くと云ふ

意味ではなく日本を中心とした東洋の現状から推して海洋は如何なる價值を持つて居るかと云ふ問題である。滿洲國が發達し日滿兩國が緊密に提携して行つたならばどうか。更に支那が之に加はり日滿支三國が歩調を一にして進むことになつたならばどうか。日滿支三國が協同し提携して東洋平和の維持に當ると云ふことは、單に東洋全民族の爲許りでなく世界全人類の福祉を増進する所以であるから、縱令前途に如何なる障礙があつても其の實現に努力しなくてはならぬのである。若し又蘇聯邦が來り加はるならば日本は敢て之を拒みはずまい。

三、筆者は曾て「、、、日本の國策にも物質的半面はある、それは日本國民の生存に關する問題であつて世界と亞細亞の間に立つ工業國たり海運國たる基礎を固めることであるが其の由て來るところは建國の事實である、、、」と言つたことがあつたが、それは現在でも同様であつて資源に乏しい日本が工業國として立つにはどうしても原料を海外に求めなくてはならぬから、日本は支那、滿蒙又は西比利亞に發展して市場を求め資源を開發する許りでなく、遠く南洋其他各方面にも發展を試

みて居るのである。換言すれば日本は亞細亞大陸や南洋其他で産出される原料を輸入して之を製品化し、更に之を世界各地に向つて輸出販賣しつゝある譯であつて、今や南米方面からも原料を得ようとする準備工作が行はれて居るのである。

四、斯様な海外發展には當然安全保障が必要であつて、日本が産業的に最も關係の深い滿蒙に於ける權益擁護に重大關心を持つのは誠に無理からぬことである。

五、現今でも日本は支那や蘇聯邦の空軍に相當の關心を持つのであるが、滿洲から朝鮮に亘る地方に大空軍國が出来、それが日本に敵對することゝなつたならばどんなに大きな脅威を感じるのであらうか、此の點から考へて見ても日本に最も接近して居る朝鮮は日本と合體して一國となり、又新に滿洲國が獨立して日本と同盟するに至つたことは喜ぶべき現象に違ひないのである。

斯く言へば産業的にも國防的にも日滿兩國提携の意義は極めて明瞭であると思ふが、斯様な兩國の關係を益々密接にすることは東洋平和維持の鍵であり日本の發展と安寧との礎石である。

六、日本の工業原料は滿蒙方面から供給を受ける丈けでは不充分であつて熱帶地方からも供給を仰がなければならぬ。他國から購入することも出来ないではないが、日本移民を歓迎する地方が世界の何處かに在り、其處で日本移民の努力で産出された物資を輸入することゝなれば至極好都合である。移民を送つた船腹を利用して工業原料を運ぶとすれば海運は成立つからして理論上いくらでも移民は送り得るが、往航丈け移民を乗せるが歸への荷物を物色するのに頭痛鉢巻と云ふやうな状態では到底澤山の移民は送れない。世界は廣い、熱帶地方にも日本人の移植に好適であつて而も日本人を歓迎して居る場所がある。

七、現今日本品排斥の聲は世界到る處に聞えるのであるが、往昔粗製濫造を理由としたのに反して安くて良いと云ふのである。之は排斥にはならない日本品宣傳である。從て比較的歐米の工場に遠い西太平洋や印度洋沿岸に住つて居る無慮十億を算する諸國民から日本品が歓迎されるのは當然である。斯様に原料の産出からそれが製品化されて販賣される迄日本品は海洋上を輸送されるのである。

八、大陸國では物資は主として鐵道で輸送されるのであるが、運賃は海運に比して十倍にも上るからして例外はあるけれども産業の發達上不利な場合が多い。即ち海洋國は産業的の活動範圍が大陸國よりも廣いのであつて此の點は海洋國の天恵と謂はねばならぬ。觀じ來れば東洋の將來は海洋に在りとも言ひ得るのであるが前途には幾多の障礙がある。太陽は既に地平線上に現はれたけれども雲霧に蔽はれて居るのである。

九、滿洲國が獨立したのは既に一年有半の過去であるが未だ日本以外に之を承認したものではなく、日本の聯盟脱退後も殆んど全世界は結束して不承認の態度を持して居るのであつて、中には承認は愚か、滿洲國解消の時機到來を期待して居る國もあるやうである。滿洲國の獨立に依つて折角東洋の前途に光明が認められることゝなつたのに逸早く之を遮らむとするものが出て來たのである。東洋の發達が氣に喰はな
いのか、日本が東洋の牛耳を執るのが癪に障るのか、それは解らないけれども兎に角彼等は表面種々の理由を附けて東洋の現状を誹謗しつゝあるのである。從つて如

何にして此の障礙を排除すべきやと云ふことは日本としては實に急務中の急務である。

一〇、前述したやうに各種の方面から東洋問題を検討し、之と海洋との關係を論述し、更に進んで國防問題にも言及し若干の教訓を得ようとするのが本稿を起草した目的である。

第二、大陸か海洋か

一、昔羅馬人シセロは「海を制するものは世界を制す」と言つたが今や吾人は無條件には之を承認することが出来ぬ。伊太利半島を平定し海上の強敵カルセーヂと相對峙した當時の羅馬人が斯様な觀念を懷いたのは洵に無理からぬことであるが之を以て直に海さへ制すれば世界が制し得られると断定出来るかどうか。

二、英國は其の建國以來海洋國として歐洲の一角に蟠踞し屢々大兵を歐洲大陸に用ゐたけれども、國策としては歐洲大陸からは孤立してもよいから須く海外に領土を擴

め、歐洲對世界貿易を獨占するに若かずとする主張が、大體に於て歐洲大陸に確乎たる足場を据え然る後に海外發展を試みるのが得策であるとする主張を抑へて世界戦争直前に及んだのであつて、歐洲大陸に戦亂が起る毎に、巧にも其の渦中に捲込まれることを避けて國利國權の伸張に努めたのであつた。換言すれば英國の繁榮は歐洲大陸の疲弊と因果關係があつたのである。従つて歐洲大陸に平和が續き其の産業が發達すれば英國は必然其の脅威を受くべき運命に在つた。過般の世界戦争は畢竟英獨兩國間に起つた斯様な利害の衝突に外ならなかつたのである。然しながら歐洲の平和と繁榮は英國の喜ばざるところであると言つたならば恐らく英國人は大きな侮辱と感ずるであらうが、英國としては歐洲大陸に英國の存立を脅かすやうな強國の出現を希望しないと云つたならば中らずと雖も遠からずであらう。だが然し英國にして斯様なことを庶幾するならば歐洲の平和維持に無關心であつてはならぬ。詮ずるところ世界戦争の渦中に投じなければならなくなつたのは過去幾世紀間歐洲平和維持の埒外に超然として居つた因果應報と謂はねばならぬ。最近英國外務次官

エーデン大尉は「航空發達の結果英國は最早島ではなくなつた従つて孤立政策は採らない」と言つたが、大英帝國の心臟部とも謂ふべき本國を歐洲大陸から空襲に曝らして置くことは英國人として決して樂觀材料ではあるまい。吾人は大英國の將來を云々するものではなく、唯々最近佛國其の他の大陸諸國と提携して歐洲平和の維持に努力しつゝあるのを見て其の本然の立場に歸つたのだと言はんとするものである。思ふに英國は先づ内を固めて外に伸びず外に伸びて而して後内を固めつゝあるのである。

二、日本では神代の昔諸岐諸冊の二神の間には國運伸長の方向に就いて論争があり、どうしても意見が合はず、前者は南進され後者は北進をされたと云ふ傳説もあり、神功皇后の三韓征伐に始まり其の後數世紀に亘る三韓の領有や豊臣氏の朝鮮の役など大陸經略の實例が若干あり、又海洋方面に活躍した事績が多少ないではなかつたが大體に於て對外發展は重要視されず國內で自給自足して居つた。然しながら斯様なことがなかつたならば果して現今のやうに純粹な日本の文化と民族とが保存育成

し得たかどうか頗る疑問であると謂はねばならぬ。

徳川三百年の鎖國は海外發展と云ふ點から觀ていくら惜しんでも尙足りないやうな感がないではないが、若し外國との交通が頻繁であつたならば此の時代の最も價値ある事業とも謂ふべき國學の復興などを悠々やつて居る餘裕があつたかどうか。

日本が對外的に目覺めたのは第十九世紀中葉以降のことであるが、東洋平和の維持と云ふ確乎たる國策が樹立されたのは明治維新以後である。如何なる動機で斯様なことを言ひ出したかは詳かでないけれども「公明正大な仁政を布くと共に障礙は斷乎排除して進む」と云ふ三種の神器を以て代表される我建國の精神は非常に崇高で包容的であつて、之を内に敷けば一君萬民の仁政となり之を外に施せば東洋平和の維持となり、延ては世界人類の福祉増進ともなるのであるから決して由緒がない譯ではない。明治初年西郷隆盛は征韓論を唱道したが、大西郷の人爲から推して之は單に韓國を征服し膺懲しようとしたのではなく東洋平和維持の必要を痛感した爲でもあつたらうと思ふ。爾來韓國、臺灣及琉球等の諸問題で日本と支那との間には絶

えず紛糾が起り、遂に日清戦争となつたのであるが、戦勝の結果得たところの遼東半島は夫の三國干渉に依て返却を強ひられ、而も其の張本人たる露西亞が滿洲占領の野心を暴露し、日本から奪つた許りの旅、大を租借するに至つたからして日本國民の憤懣は其の極に達し、所謂臥薪嘗膽十年の準備を整へて當時世界の雄邦であつたところの露西亞を南滿洲から驅逐し去つたのであつた。然しながら若し三國干渉がなかつたならば、日露戦争はなかつたかも知れず、縱令あつたとしても恐らく形式を異にして居つたらう。日露戦争後形勢は一變した。露國の脅威は餘程薄らいだ丈けで未だ全然之を排除し得たと云ふ譯ではなかつたけれども、海洋方面からも脅威を感じるやうになつた。何となれば日露戦争前露西亞は佛蘭西の支持を受けて滿洲に發展したので、直接脅威を受けたところの日本は英國と結んで之に對抗し、米國も亦露西亞の南下を憚り英國同様日本を援けたからして、佛蘭西は積極的に何等策の施しようがないことになり結局日本は全力を對露政策の遂行に傾注することが出来たのであつたが、日本が露國に勝ち勢侮るべからざるを見るや列強の我に對す

る態度急轉するに至つたからである。

世界戦争中から日本の支那に於ける行動は動もすれば列強から誤解され、支那は之に乗じて「以夷制夷」の外交術を弄し益々以て日本の立場を不利ならしめんとしたかの如くであつたが、現に媾和會議や華府會議に於ける支那代表の言動は日支兩國の爲將又東洋平和の爲誠に遺憾に堪へざるものがあつた。

九國條約が成立した表面の理由は「ルート宣言に明記されてあるやうに「支那自體をして有力且安固なる政府を確立維持する」爲であつたけれども、爾後日本が暫く傍觀的態度を採るや支那の國內は却つて亂脈となつて、國民は塗炭の苦を嘗め、之と同時に軍閥は國民の鬱憤を外に向はしめる爲に荐りに排外熱を煽つた。

滿洲事變や上海事變も畢竟長日月に亘る排日侮日運動に胎胚して居るのであるが、支那政府は之を日支の直接交渉に依らずして聯盟に訴へ外國勢力を導入して解決しようとした。然しながら其の結果は徒らに解決を遷延し而も益々支那に不利になつたのではないかと思ふ。

尙此の外にも東洋に於ては國家の存立上文化の發達上極めて危険な外來の宣傳も無いとは云はれぬ。而して斯様な運動は何處に根源があるか明言し難いけれども、此の運動から脅威を感じるものは日本許りでなく東洋全體であつて、將來此の害毒が蔓延したならば經濟的にも文化的にも非常な惡影響を及ぼすであらう。

四、前述したところは實に明治維新以來の日本對亞細亞大陸の關係を略敘したのであるが、日本の行動は兎角に外國人から誤解され甚しきは日本人の中にも外國の言論に迷はされたものがないとは言へぬ程であつたが、併し、東洋の平和が維持されなければ日本の存立が危殆に瀕するのみならず、東洋民族と雖も決して幸福でないことは歴史が之を證明するのであつて、此の點に關しては前述した英國の發展史から好個の教訓を得るのではないかと思ふ。大陸の安寧は大陸自ら之を維持せよと云ふ態度を採ることは縱令一時は成功であるやうに觀察されても決して國家百年の計ではないのである。

況んや從來の英國と現在の日本とは對外的に情況を異にし、工業原料の大部分を此の方面から得て居るに於てをやである。勿論昔は日本にも日本を「東洋の英國なり」と誇るやうな海洋論者も確にあつたが、前述したやうに東洋平和維持に萬斛の努力を傾けて來たことは極めて幸福なことであつた。吾人は英國に就いて論じたやうに亞細亞大陸から脅威されたくない、而も混亂が起つても亦日本を敵視するやうな國家が出来ても脅威を受ける點では同じことである。換言すれば日本は大陸に於て日本と協調し一身同體となつて東洋平和維持に當るところの「有力且安固」な國家が欲しいのである。滿洲國に對する日本の態度も斯様に考へればよく判ると思ふ。今や滿洲國が獨立し日本と提携して東洋平和維持に任じようとして居るのであるから日本としては此の上なく喜ばしいことだ。支那も蘇聯邦も今日迄の行懸りや感情をすつかり水に流して滿洲國と同様の態度に出て貰ひたいのが吾人としては衷心の願望である。

五、前述したところに依り東洋平和維持と云ふことが如何なる意義を有するかは略明かになつたらうと思ふが、之は決して日本の利益を犠牲に供するのではない、東

洋民族全般の共存共榮を圖ると同時に日本の生存を擁護し發展を促進して行かうと云ふのである。然らば現在日本は如何なる國家として物質的に存立して居るか云へば、それは亞細亞と世界の間に立つ工業國たり海運國としてゝあつて、一方には亞細亞大陸、他方海洋を隔てた世界から原料を輸入し之を製品化して世界に賣捌きつゝあるのである。何故に然るか云へば日本の天然の位置即ち建國の事實が然らしむるのであつて、殊更にさうしようとなつた譯ではないが自然にさうなつたのである。東洋の平和維持を精神的國是なりとすれば、後者は物質的國是であるが寧ろ天から授かつた日本國民の生活様式であると言ふのが一層適切であるかも知れぬ。

六、日本は領土が狹隘にして資源に乏しいからどうしても海外發展を試みなければならぬと云ふ説は一應尤もである。併し海外發展は決して領土の擴張を意味しない。四面環海の日本、千島から臺灣へと伸び又南方諸島から西太平洋一帯に擴がる日本領土の地理的利益を考慮に入れたならばどうして日本が貧弱だなど、言ひ得やうか。領土が廣いとて資源が豊富であればとて交通の便殊に鐵道に比べれば十對一も

運賃の廉價な海運を利用することの出来ない國家は極めて不利である。斯様な國家を靜的に富んで居ると言ひ得るならば日本は動的に富んで居ると言つてもよからう。苟も日本國民たるものにして、日本が貧弱であると考へるならばそれは日本人たるの自覺に不足して居るのである、祖先に對して恥ぢなければならぬ。

日滿經濟ブロックが出来たところでこれ丈で満足すべきでない。之を基礎とし足場として海洋發展を勵行し、益々以て日本獨特の生活様式を擴充することに努めねばなるまい。昭和八年版の日本國勢圖會にも「日滿經濟ブロックの結成は之を基礎として我産業が世界に發展せんが爲で、之を守つて守勢、萎縮に轉ずることではならぬ、産業國としての日本は未だ青年である、進取の氣を忘れたら、忽ち國際競争に取殘されるであらう」と書いてあるが至言と謂ふべしだ。

七、然しながら海洋發展と言つても何等排他的意味を有するのではない。唯諸外國と正當な取引をやつて行かうとする迄である。南北亞米利加は北米合衆國以下諸國の協調に依つて平和が保たれ、歐洲は英佛其の他諸國の協同動作に依つて平和が維持

されるであらうから、日本は蘇滿支三國と協同し提携して東洋の平和を維持し、外は歐米と鼎立し以て世界の平和と人類の福祉増進に貢献しよう」と云ふのである。

第三、海洋發展の重要性

一、「亞細亞大陸や海洋を隔てた諸國から原料を輸入し之を製品化して世界に賣る」と云ふことは天から授かつた日本國民の生活様式であるが、之は換言すれば日本は亞細亞大陸以外にも市場と資源とを求めなければならぬことになる。筆者は別に日本内地や亞細亞大陸を輕視する譯ではないが、これ丈で自給自足して行かうとすれば無理がある。日滿經濟ブロックで自給出来るものは勿論それでよいのであるが、足りないものがあり縱令得られるとしても非常に高價な物資は戰時如何にすべきかを充分に考慮するのは勿論として、海洋を隔てた諸國から輸入しても差支はないと云ふ丈けである。距離が遠いと言ふかも知れぬが運賃の廉い海運に依るのであるからそれは問題にならぬ。此の點に關しても前記日本國勢圖會には「我國は天然資源

に乏しいから、諸種の工業原料に不足を感じる。併し原料が無いからと云つて工業が發達せぬと云ふ譯のものではない。不足の原料は輸入してよいから工業の發達を期さねばならぬ。手許に原料があると無いのでは便不便、利不利は同日の論ではない様であるが、我國の如き四面環海の國は世界の何處からでも極めて安い運賃で原料を輸入し得るから、國內に原料の無いことは工業の發達に必ずしも不便、不利とは云ひ得ない。陸上運賃は同距離の海上運賃に比し少くとも十倍以上を普通とするが故に、若し日本が大陸であつたら、國內に原料があつても其の運賃は外國から船で運ぶより高くつく場合も想像し得る。例へば米國西海岸に産する原料を同國東海岸へ運ぶ鐵路約四千籽の運賃は之を同地より日本まで海上約八千五百籽を運ぶのに比べて三倍半も高くつくのである。米國中部地方へまで運ぶにしても日本までの約二倍以上の運賃を必要とする。海國は斯かる便宜を有するが故に、支那や馬來半島から我國に輸入する鐵礦の方が米獨などの自國産鐵礦より運賃が安いのである」と書いてある。

二、同じく海外から原料を輸入するにしても純然たる商取引をやるよりも、日本人が海外に出掛けて企業を行ひ採掘するなり生産するなりした物資を日本に輸入した方が遙に有利であらうと思ふ。人口問題を解決する爲には海外移民を奨励するの必要があると云ふ説があるが、從來官民共に非常に努力したけれども最大二萬乃至三萬の移民を送り出し得たに過ぎぬから、到底毎年百萬に上る人口の増殖を緩和する譯には行かぬ。二萬や三萬の移民を外國に出したところで後に残る九十萬の増加人口をどうするかの問題は解決出来ないのであるから、若し海外に出た移民の力で日本の工業化に必要な原料を産出して、移民を載せて行つた船で日本に送ることにしたならばどうかと思ふ。現在二萬乃至三萬しか移民が出せないのはさう澤山送つても歸りの荷物がなく海運が成立たないことが大きな原因を成して居るかも知れぬのであつて、現に南米に行く移民船は歸りの荷物それも南米から北米に行く荷物が出揃ふのを待つ爲にヴェノス・アイレス港で二週間も高い繋泊料を拂つて船待ちをしなければならぬのである。従つて歸りの荷物があれば海運は成立つからして移民も

一層多數送れる勘定になる。一石二鳥とは實に之れである。

日本の工業化に必要な原料を産出し、之を日本の海運に依つて本國に送ると云ふことは前述した日本の物質的國是を遂行する所以でもある。斯様な移民は之を名づけて「物質獲得移民」と言つてもよからうと思ふ。

三、然しながら如何に物資獲得移民を送らうとしたところで北米や濠洲のやうに世界は到る處日本移民を排斥して居るではないか、又縱令現在では排斥しないにしたところ將來は屹度排斥されるに決つて居るではないかと言ふ論者があるかも知れぬが俗に所謂捨てる神拾ふ身の譬へにもある通、日本移民を歓迎しつゝある地方も皆無ではない。伯刺西爾や南洋方面は其の著例であるが、殊に此等の地方は日滿經濟ブロックで不足を感ずる原料の産地であることは注目し値すると思ふ。

伯刺西爾には現在十何萬かの日本人が居住して居る許りでなく、夫の廣大無邊と謳はれる北伯アマゾン流域では非常に日本移民の入殖を歓迎し、南米拓殖會社の如きは二百萬町歩にも垂んとする程のコンセッションを獲得し、目下開拓に努力して居

るのであるが、更に同地方政府は數年前一介の日本旅行者に對して日本人入殖を條件として千何百萬町歩と云ふ廣大な地面の優先的拂下權を賦與したことがあり、現今でも當時と同様の態度を持續して居るのである。同地方は水運が非常に便利であるのみならず、日本の工業原料として有用な棉花を始めとし各種の物資を將來多量に生産し得る望があるからして、同地方に日本移民が這入つて新産業を興すと云ふことは日伯兩國の親善及提携に對して頗る重要味を持つて居るのである。

南洋方面はどうかと云ふに、日本に近いことではあり移民を行ふにも原料を輸入するにも極めて好都合で、現在鐵鑛、護謨、麻類等の原料品を輸入しつゝあるのみならず、移民も亦可能であつて將來は日本移民の手に依つて多量の棉花をも生産出来るかも知れないと云ふことであるが、南洋方面は漁場としても相當有望であると言はれて居る。

物資獲得移民の今一つの利點は移植地に新しい産業を起し地方の官民を潤ほすからして自然日本人の移植が歓迎されることである。況んやアマゾンでも南洋方面でも

熱帶地であつて日本人の移植に好適であるに於てをやである。之を要するに日本は温帶や寒帶で産出される原料は總べて日本内地や亞細亞大陸から供給を受くべきであるが、熱帶産のものはアマゾンと南洋方面から供給を受けるやうになるかも知れないのである。

四、次に然らば市場はどうかと云ふに、現在日本の商品は世界各國で排斥されて居るけれども、其の理由は從來の粗製濫造と異なり優良廉價と云ふことであるから排斥の理由にはならない。斯様な理由で排斥すればする程宣傳になる。之れ程有效な宣傳はない。そこで今迄日本と條約を結んで居らない國々も條約を締結して日本と自由に通商を營まうと云ふ氣運が起つて來た。最近アフガニスタン、コロンビア、エチオピア、モロッコ等から使節を派遣して來たのは之が爲である。

昭和八年十一月迄の貿易情勢を觀ても、列強の貿易は何れも萎縮して居るのに日本のみは次に示すやうに激増して居るのである。

國別	輸 出		輸 入	
	金 額	前年同期比較	金 額	前年同期比較
日 本	一、五二五 <small>(百万円)</small>	四〇・一%増	一、五六五 <small>(百万円)</small>	三五・六%増
英 國	三四四 <small>(百万磅)</small>	〇	五五〇 <small>(百万磅)</small>	五・五%減
米 國	一、二九九 <small>(百万弗)</small>	三・二%減	一、一八八 <small>(百万弗)</small>	五・九%減
獨 國	四、〇五三 <small>(百万馬克)</small>	一五・〇%減	三、四七九 <small>(百万馬克)</small>	九・四%減
佛 國	一五、一三四 <small>(百万法郎)</small>	六・七%減	二二三、八三七 <small>(百万法郎)</small>	三・〇%減

斯様に日本商品は世界各地に於て歐米の夫れと競争し急速に市場を開拓しつつあるが、何故然るか云ふに勿論それは爲替安にも因るけれども、恰も之と時を同じうして産業の合理化が成功したことや、軍需工業が勃興して一般産業に大きな刺戟を與へたこと等もあり、相當基礎が鞏固であるからして今後爲替相場が騰貴しても相當程度迄現在の市場を維持出来るのではないかと觀て居る向が多いやうである。殊

にスエズ運河以東印度洋及西太平洋沿岸に居住する十億の人類は、歐米よりも近いところで出來而も優良廉價な日本商品を歓迎するのは寧ろ當然のこと、謂はねばなるまい。要するに列國の不當な壓迫さへなかつたならば我對外貿易の前途は洵に洋洋たるものがあると謂つてよいやうである。本問題に就いて日本國勢圖會には次のやうに論じてある。

「此處一二年來の我産業の發展は……我爲替の下落が重要な一原因で、之が爲には國內に於ては外國品の競争が困難となり、國外に於ては我生産品の市場獲得を容易ならしめて居るが、併し爲替下落だけが唯一の原因ではなく、我産業は過去に於ける長き準備時代の努力が報ひられて今や發展の機運に遭遇したもので、爲替安は之にキツカケを與へたのである。故に我國民は此機會を利用して産業の發展、國力の充實、國威の發揚に十分努力せねばならぬ。

列國が我生産品の國際市場に於ける競争を不正なりとして排斥せんとする氣運も見えるが、一國の經濟力が發展する場合には何うしても從來の國際的均衡は一部分破

られるから、それが爲に不利益を蒙る者より多少の反感を以て迎へられるのは已むを得ないことで、我國民としては斯かる事に屈せず益々其經濟的發展に進むべきである。もとより徒らに外國との間に事端を繁くすることは避くべきであるが、我國民經濟が力強いものにさへなれば前途は自ら開かれるのである。「非常時」の名に怯えて退嬰的となつてはならぬ。今の「非常時」は我國力が伸びんとして起つた「非常時」である、故に之に善處するの途は有らゆる艱難を切抜けて國運の進展を期することではなければならぬ。』

第四、國民生活と國防との關係

一、前述したところは我國民生活の概観であるが、此の國民生活の意義を要約すれば精神的には東洋平和を維持することであり、物質的には亞細亞と世界の間立つ工業國たり海運國たることであつて、之は我建國の精神と事實から出發したもので日本の國是である。然しながら國是遂行に當つて何等の障礙のないと云ふことは珍ら

しい現象であつて、大抵の場合に障礙が現存し又は想定されるのである。而して障礙は國內的、國外的又は不可抗力の數種がある。そこで障礙排除の手段を必要とするのであつて國外的障礙を排除するのは外交と軍備である。換言すれば國民生活から國是が定まり國是遂行の障礙が現存し、又は想定される結果軍備が生れるのである。従つて國民全體の軍備であり國防である。

二、勿論從來は國民生活と國防との關係に就ての認識は斯様に明確ではなかつたけれども、國防は斯様に考察するのが正當であり、本筋である。然しながら戦争は決して最近になつて急激に國民的となつた譯ではなく、古代に於ては全國民の感情と利害から出發した眞の舉國一致的戦争が行はれたものであるが、中世になつて其の意味が稀薄となり國民と軍隊とが離れ離れになつて仕舞つたのを、今から百餘年前漸次國民皆兵の風が再現して國民全體の意志を背景として戦争が行はれるやうになつた。之は西洋でも日本でも同じであつて最近では舉國一致の程度が直に勝敗を卜する尺度であると觀ても敢て過ぎまいと思はれるやうになつたのである。

日清、日露の兩戦争の際に日本は露支兩國の舉國不一致に對して舉國一致を以て當つたことが戦勝の重大原因ではなからうか、若し夫れ如何にしたならば舉國一致を促進し得るかと言へば、先づ國民全體が

(イ) 如何にして生存且向上すべきや

(ロ) 生活様式の擴充に對する外的障礙の有無

(ハ) 若しありとすれば如何なる障礙なりや

(ニ) 如何にせば障礙を排除し得るや

を充分に攻究することである。國防とは要するに外的障礙排除の手段である。障礙が明かに存在するか想定される場合に之を排除するのは當然である。勿論之には國民の生活様式が正當であると云ふ信念を絶対必要とするが、苟も國民に斯様な信念があれば障礙排除の止むを得ざる所以も自ら明かとなり、従つて國防と國民生活とは別物であるなど云ふ妄念は起らぬ筈である。重ねて言ふ、國防は國民全體の國防である。軍隊丈けの國防では絶対にない。苟も國民たる者は老幼男女を問はず總て國防の責に任ずべきである。

第五、日本の國民生活と其の障礙

一、凡そ國是なり國策なりと云ふものは國民が如何に生存且向上すべきやの方策であるからして、茲に二つの國家があれば二つの國策があると見なければならぬ。而して二つの國策があれば兩者が衝突する場合もあり得る。例へば日本が東洋平和維持といふ國策を奉じて進む場合に之を喜ばない者があつたり、又は世界と亞細亞の間に立つ工業國たり海運國たらんとする場合に日本の地位を奪はんとする者があるとするれば、日本は國策遂行上障礙に遭遇するのである。

二、我國策の遂行上最も關係の深いのは支那であるが、果して如何なる態度を持して居つたらうか。最近汪兆銘氏は「以夷制夷は支那の外交政策ではない」と言明して居るけれども從來に於ては遺憾ながら事實が之を證明して居ない。

世界戦争後媾和會議に於ても將又華府會議に於ても、支那側の策動の爲に日本は随分苦境に立たせられたことは前述した通であるが、今後は兎も角之迄の支那の排日

は眞に言語に絶するものであつた。それも支那及支那人に有利であるならばまだしもであるが果してどうであらうか。華府會議の際九國條約が結ばれた結果日本は暫く支那に關して傍觀的態度を採つたのであるが、之が果して支那を幸福にしたかどうか。英人ブランド氏は「華府會議の結果は支那の内情にも對外關係にも惡影響を及ぼした」と論じて居るが、實際支那は世界戦争後年々歳々亂脈となりつゝある許りでなく排外殊に排日運動にも拍車を掛けた。

滿洲事變に就ても支那政府は之を日支の直接交渉に依らずして聯盟に訴へ、外國勢力を導入して解決しようとしたことは前述した通である。之が「以夷制夷」に非ずして何ぞやである。去る五月三十一日の塘沽協定以後排日抗日は下火になつたやうではあるけれども、一方には聯盟と技術工作を進めると同時に外國の援助を得て空軍の擴張に餘念がないのである。

去る十一月三日英國外務次官エーデン氏は「航空が發達した結果、英國は最早一個の島ではない」と言つたが、日本も支那や蘇聯邦で現に具體化しつゝある空軍の發

達に就いては勿論怖れはしないけれども決して無關心ではあり得ない。

三、現在東洋では國家の存立上文化の發達上極めて危険な外交の宣傳や陰謀が行はれて居ることに就いて前述したが、斯様なことは歐米各國としても苟も東洋に權益を有する以上決して望ましくないことではなからうと觀察される。

近來蘇聯邦が極東の兵備を充實しつゝありと云ふ情報が荐りに傳へられるが、其の目的は果して那邊に在るかは別として之は確に東洋平和に對する一脅威と謂はねばならぬ。

四、次に然らば列強の對日態度は如何と云ふに、日本の國際聯盟脫退後勿論積極的行動に出た者はなかつたけれども、さうかと言つて未だ一國と雖も態度を改めた者はないのみならず、日本商品排斥の聲は歐米に喧しく相携へて日本の通商的發展に對抗せんとする氣勢を示して居り、又或る國の如きは最近軍備充實熱が勃興し、名目は種々あるやうであるが盛んに軍艦が起工され飛行機が製造されるのを見ては日本として晏如たり得る筈がない。從來造らなかつたからと言ふかも知れぬがそれは別

に國防上不安を感じなかつた爲ではないか。日本から観れば從來は主力艦とか八吋砲巡洋艦とかいざと云ふ場合に急造し悪い艦種の充實に努力して居つたのであるが、最近漸く手が空いたので六吋砲巡洋艦其の他の建造に着手したのであるとも言ひ得ると思ふ。

五、滿洲上海兩事變の際列強の對日態度は随分惡化したのであるが、之は從來も同様であつて過去三十年間東洋に何か事件が起ると不思議にも我を誤解し、まかり間違へば武力的壓迫をも加へ兼ねないやうな態度を示した者さへあつたのである。東洋の現狀が前述した通とすれば斯様な情勢は恐らく將來に於ても急には改善しやうにも想はれないが、其の裏面に從來とは異なり彼等に充實した軍備があると云ふ場合は倍々以て危険である。勿論そんな懸念はないとも言はれようが、何に依つて斷じてないと云ふ保障を得るかゞ問題である。

第六、日本の國防と海軍

一、前述したところに依り日本の國民生活をやつて行かうとすれば、其の前途には直接間接大きな障礙が横はつて居ることが明かとなつたと思ふが、次に來るべき問題は如何にして之を排除すべきやである。外的障礙排除の手段は外交と軍備の外にない。外交は平時戰略の一部であると觀る者が歐米にはあるが至極尤もであつて、平時には外交が第一線に立ち戦時には軍備が第一線に立ち外交が之を支援すると云ふ意味である。然しながら軍備は戰爭に備へる許りでなく外交の背後の力となつて戰爭を未然に防止するのも重要なことである。

二、軍備には海陸軍の別はあるが、國防は元來一元であつて唯陸軍は陸正面に備へ海軍は海正面に備へるに過ぎず、共に國防と云ふ單一目的に向つて進みつゝあるのである。現在の日本のやうに大陸からも海洋からも脅威を感じる場合にはどうしても兩者の並立を必要とする。海軍は海正面に備へるのであるが其の對照物は確に東洋に進出可能な他國の海軍力である。素より此方から進んで他を侵したり攻めたりする意志はないのであるが、萬一の場合敵の來攻を阻止排撃する實力がなければなら

ぬ。實力とは決して數量のみを云ふのではない。元來兵力には質と量とがある。古來日本では寡を以て衆を破るのを武人の誇としたのであるが、之は質を以て量を打つと言ふ意である。質には艦種があり又同艦種の中でも排水量、速力、兵装と云ふやうな有形的のものもあれば訓練、士氣と云ふやうな無形的のものもあるが、今日比較に上るものは有形的のものである。而して質が同じ場合には衆は當然寡を倒すことになるのであるから、七割なら足りるとか六割では足らぬとか云ふのは現今の情況には全然適用出来ないことであるのを忘れてはならぬ。質が嚴密に制限される場合には量は均等でなければならず、強いて量を制限しようとするれば質は無制限でなければならぬと云ふことになる。此點の認識は蓋し國防軍備問題研究の最大要諦であらう。

三、最近航空が發達して軍事上重要な地位を占めるやうになつた爲、國防を論ずる場合には必ずや航空問題にも及ばなければならぬ。軍備の充實には航空兵力の擴充を伴ふことは影の形に添ふが如しであるが、民間航空も亦決して閑却することは出

來ない。蓋し軍事航空の第二線と謂ふべきものであるからだ。世人は動もすれば「航空は儲からぬ」と云ふけれども、世界の航空線を調べて見ても埃及南阿線を除いては收支償つて居るものはないと云ふことであるから寧ろ儲からぬのが普通であらうと思ふ。之は丁度滿鐵沿線の旅館事業は儲からぬが、鐵道事業其の他を有利にする爲に止める譯には行かないのと同様で、貿易、交通其の他一般文化の發達を促進する必要から損益を超越してやらなければならぬのである。尙又獨逸では飛行船事業が非常に發達し米國の飛行船のやうに危険がなく、曾て日本に來航したグラッフ・ツェッペリンは今でも健在して居るが、日本でも民間企業として獨逸のやうに飛行船を發達させることが出来たならば直接航空の發達に寄與する許りでなく、間接的には輕金屬工業の發達を促進し、飛行機製作事業其の他を裨益するところ頗る多からうと思ふのである。

第七、結 論

一、以上數節に亘つて論じたところは雜駁ではあるが、之を綜合すれば左に掲げるやうな事柄を歸納出来ると思ふ。

(イ) 日本の根本國策は精神的には東洋平和維持であり、物質的には亞細亞と世界との間に立つ工業國たり海運國たる地歩を固めて行くことであるが、此の兩者は我建國の精神と事實から出發したものである。

(ロ) 日本は滿、蘇、支等の東洋民族と相提携して東洋の平和を維持して行かうとするのであつて、門戸を閉鎖しようとか利益を壟斷しようとか云ふ排他的意圖は毛頭含んで居らぬのみならず、更に進んで歐米と相並んで世界の平和及人類の福祉増進に寄與しようとして居るのである。

(ハ) 日本國民の經濟生活も何等侵略的意味はなく唯天から授かつた生活様式を擴充しようとするに過ぎぬ。

(ニ) 吾人は日滿經濟ブロックに立籠るべきでなく、之を基礎として足場として東洋發展を試みなければならぬ。

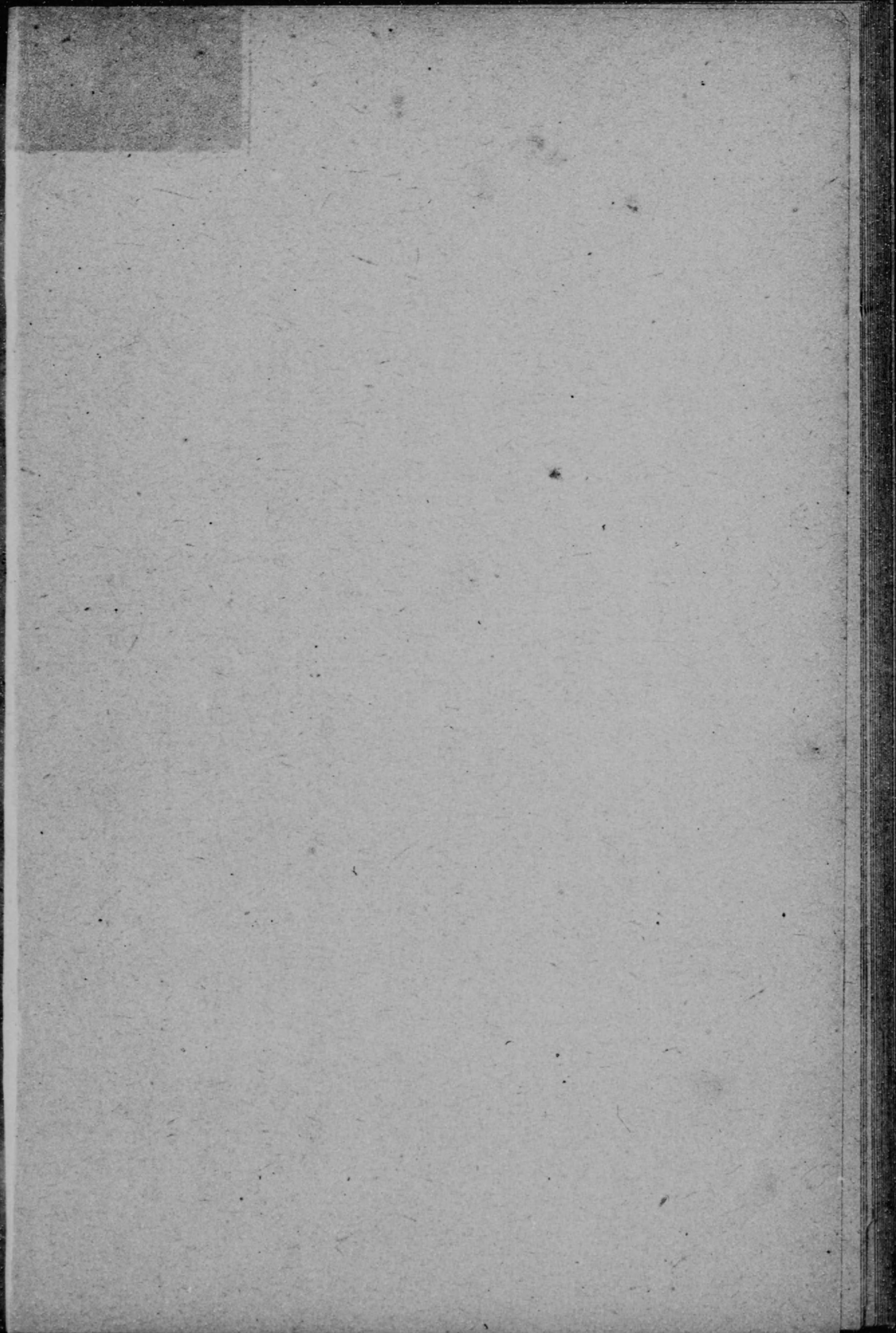
(ホ) 吾人の前途は多望ではあるが多難である。陸にも海にも脅威が現存し想定される。

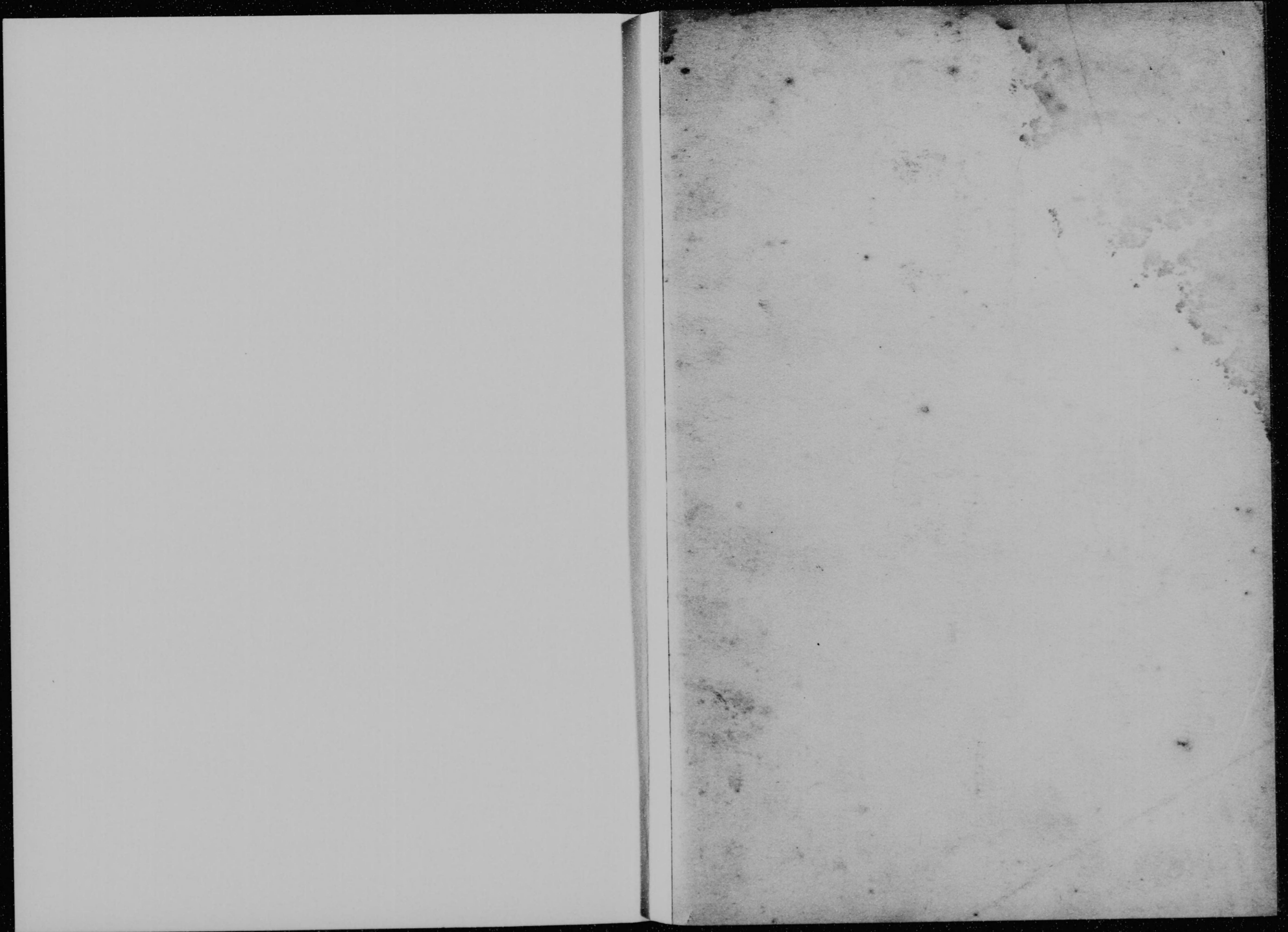
(ヘ) 海正面の脅威に備へる爲には海軍力を充實せねばならぬ。軍縮問題も先づ國防上の見

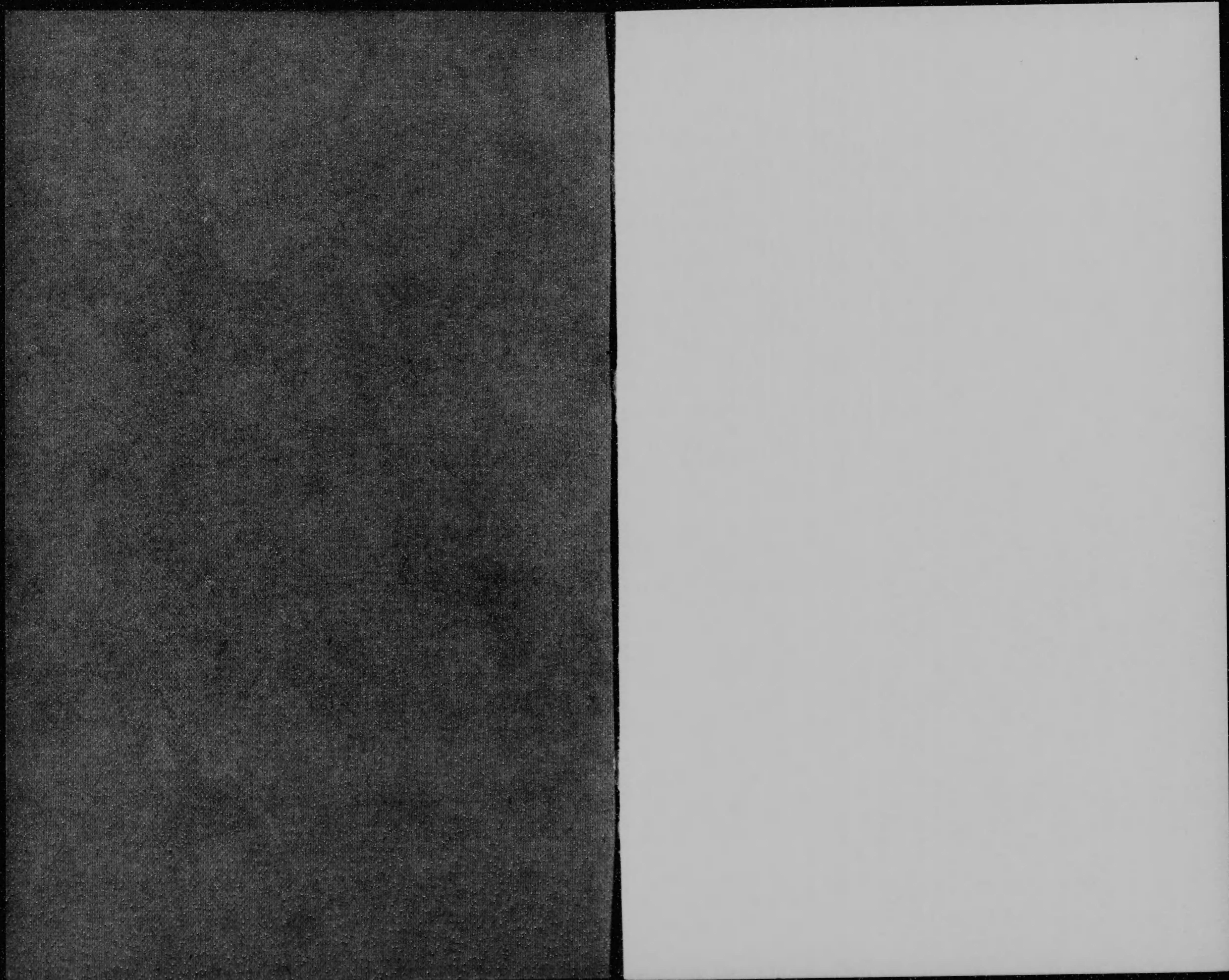
地から充分に検討すべきである。

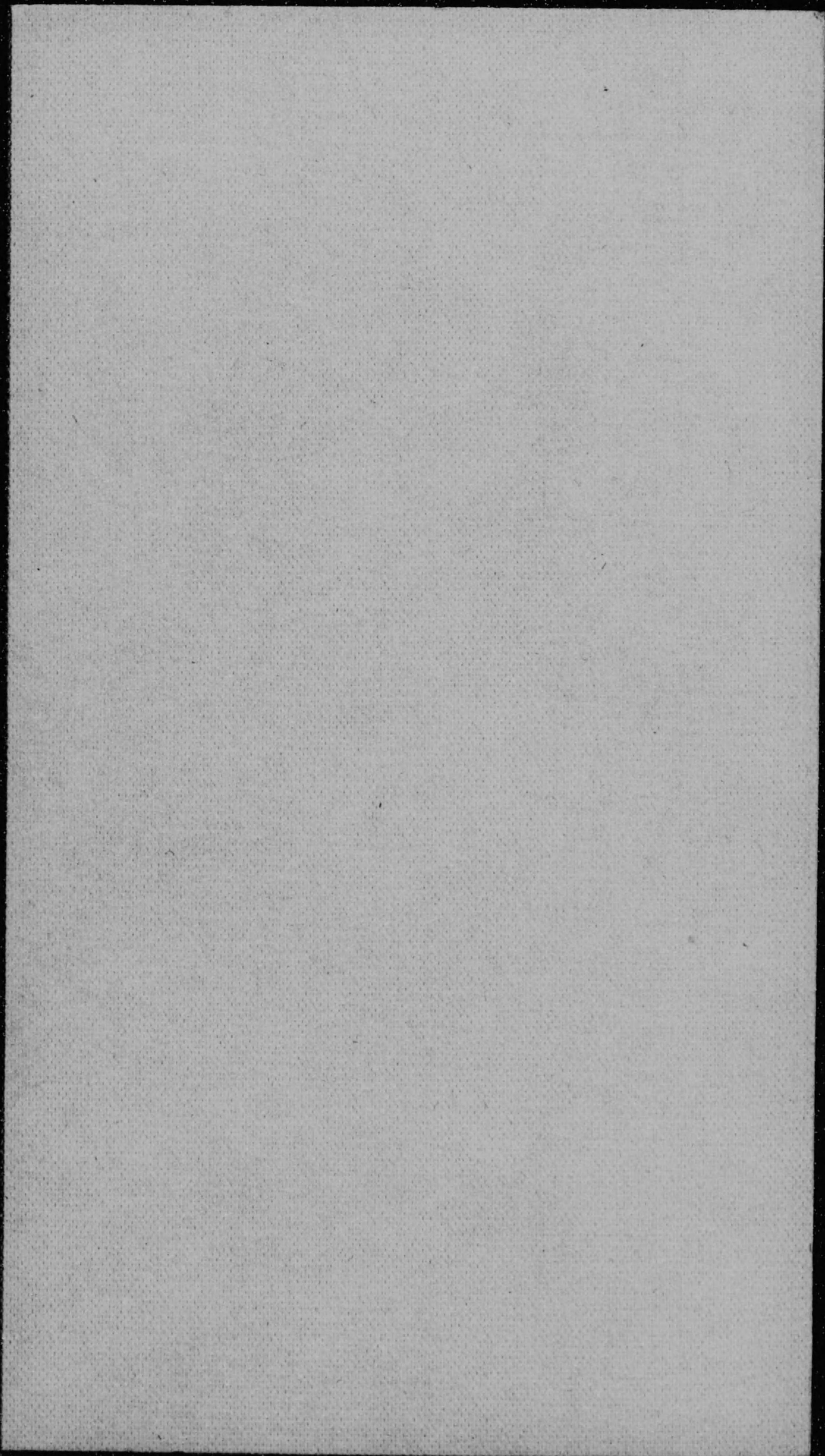
二、吾人の庶幾するところは平和である。軍備の充實を強調するのは「平和は成るべく長かれ戦争は成るべく短かれ」と願ふからである。萬一に對する適切な備へがあれば國家は安泰である。來るべき軍縮會議を中心として日本は未曾有の難局に立つかも知れぬが、舉國一致之が打開に邁進すれば何等の心配はないのである。

(皇紀二五九三年十二月二十日稿、終)









AS
111
03